慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	状況の変化に伴う帰属様式の変化に関する実験的研究
Sub Title	The change of attributional styles against the several situations
Author	村上, 裕恵(Murakami, Hiroe)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1989
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.29 (1989.) ,p.25- 32
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000029-0025

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

状況の変化に伴う帰属様式の変化に関する実験的研究

The change of attributional styles against the several situations

村　上　裕　恵
Hiroe Murakami

Questionnaires were administered to measure attributional styles on four dimensions (locus, globality, stability, and controllability) for four types of situations (achivement success and failure, interpersonal success and failure). YG personality questionnaires were also administered. In the first study, college students completed the attributional qvestionaire. The reliability coefficients of eight measures (4 dimensions×4 situations) ranged from .69 to .84 and the reliability coefficients of sixteen difference measures (achivement-interpersonal, success-failure×4 dimensions) ranged from .53 to .68. Then in the second study, college studeents completed the YG personality questionnaires in addition to the attributional questionnaires. The results of the correlational analysis showed the neccessity of an analysis bstween personality (social extroversion, depression) and sixteen difference masures. The major conclusions were: (1) the difference measures of achievement-interpersonal related to social extroversion in the locus, global, and stable dimensions; (2) the difference measures of success-failure related to depression in the locus and global dimensions.

はじめに

人の認知様式と精神的健康との関連をさぐる研究は盛んになってきており，そこでは，比較的日常的なレベルでの精神的不健康，特に抑うつ傾向についての研究が中心となっている。又近年，軽うつ病の増加が報告されており，まさしく現代生活に即した問題となりつつある。この抑うつ傾向と，認知様式に関する研究で最も注目されているのが Weiner (1979) の原因帰属様式をとりいれた Abramson et al. (1979) の Learned Helplessness についての一連の研究である。Learned Helplessness 理論とは，回避不可能な電気ショックをうけた犬が，その後の回避逃避学習において無力感を示し学習に失敗することをまずＬＨ状態とし，これは自己の反応と結果の非随伴性を認知したためであると解釈するものである。その後，非随伴性の認知のみでは必ずしも抑うつ状態に落ちいらないという研究結果が次々とだされ，Abramson et al. は最終的に Weider の原因帰属理論ととり入れ，ＬＨ理論を完成させている。そこでは人は反応と結果の非随伴性を認知するとこれを内的—外的，安定的—不安定的，全般的—特殊的の３次元上に帰属する。そして，成功事態を外的に不安定的に特殊的に帰属するほど，また，失敗事態を内的に安定的に全般的に帰属するほど抑うつ状態は高まるとした。その上，この認知スタイルを一種の人格変数と考えて，Seligman et al. (1979) は ASS (Attributional Style Scale) を作成している。この ASS は成功および失敗の 12 の仮説場面から構成されており，それぞれの場面の原因を推測して，上記の三次元上に帰属するように作られている。Seligman et al. (1979) が，この ASS を用いた結果，BDI (Beck Depression Inventory) によって抑うつ傾向が高いとされた被験者は，そうでない被験者にくらべ，失敗事態を内的，安定的，全般的な原因に，成功事態を外的，不安定的，特殊的な原因に帰属することが示されて

いる。しかし，この ASS では単に場面を成功場面と失敗場面に二分してそれぞれの帰属様式をとらえているだけで，それ以上の場面内容については，特に分類がなされていない。そのためゲームで勝つ場面と，対人関係で成功する場面が同じ成功場面としてまとめて取りあつかわれることとなる。しかし，我々の実際生活において，ゲームに勝つことと，対人関係で成功することとは，かなり違った意味を持ち，個人の心理的測面に与えるインパクトも異なるのではないかと考えられる。Anderson & Arnoult (1985) は，この場面内容ということに注目し，場面を対人領域(Interpersonal)，非対人領域(Non-interpersonal) の二領域に分類し，それぞれの成功場面，失敗場面の帰属様式や統制可能性の認知と，抑うつ感，孤独感，恥の感覚などの人格変数との関係を調査したところ，対人領域の失敗場面で，認知変数と人格変数との有意な関係を多く見出した。これは抑うつ感，孤独感，恥の感覚といったものは，単にテストやゲームに失敗したというような非対人領域の帰属様式や統制可能性の認知よりは，対人領域の帰属様式や統制可能性の認知に影響されるものなのではないかということを示唆するものである。又，鎌原ら (1983) (1984) も対人関係領域，課題達成領域おのおので別の帰属測定尺度を作成しており，やはり状況に特殊な帰属尺度がより人の認知スタイルを適確にとらえることができるようである。そしてその上で，本研究では，帰属様式の変化というものを考えてみたい。これまでの研究では，ある一連の場面に対する個人の平均的帰属様式を一つの変数としてとり上げ，それがその個人の人格のどのような側面と関連するかを追求するにとどまっていた。しかし，我々の日常生活における帰属様式をふり返ってみると，ある場面ではこのように帰属し，他の場面では違った形で帰属するというように，場面ごとにかなり帰属様式を変化させているように思われる。つまり，これは原因帰属様式の変化様式とも言えるようなものであって，どのような場合に対しても同じような原因帰属様式を持ち続けるのか，あるいは場面ごとに原因帰属様式を変化させるのか，といった変化の有無，又，どのように変化させるのか，といった変化の形態としてとらえられよう。

そこで，本研究では，Abramson et al. (1979) の着目した成功場面と失敗場面 (2) と Anderson & Arnoult (1985) の着目した対人領域と非対人領域（課題領域）(2) を設定し 2 領域× 2 場面の計 4 種の帰属場面を用意することとする。その上で，対人領域と課題領域での帰属様式の差，成功場面と失敗場面での帰属様式の差を測定する変数を作成し，それらの差の変数と，一般的な性格検査（YG 性格検査）の各人格変数との関係を実験的に調査することを目的とする。つまり，対人領域と課題領域とで帰属様式を変化させること，もしくは変化させないことと何らかの人格変数とは関連性があるのか，あるいは成功場面と失敗場面とで帰属様式を変化させること，もしくは変化させないことと何らかの人格変数とは関連性があるのかを探索的に調査してみたい。

次に帰属次元としては，Seligman et al. (1979) の用いた原因の位置としての内的—外的 (Locus)，全般的—特殊的 (Global)，安定的—不安定的 (Stable) の三次元と，その場面全体の統制可能性次元 (Control) の計四次元を用いることとする。Locus 次元については，Rotter (1966) による Locus of Control 概念があるが，これは正確には統制の位置をとらえるものであり，Control 次元がすでに含まれることとなる。しかし，Control 次元はそれ自身，最も重要な次元であり，独立した変数で扱うべきであるという主張 (Adderson et al. 1983) もあり，Locus 次元では Control の概念を入れずに原因の位置のみをとらえ，Locus, Global, Stable 次元とは別に状況全体の統制可能性としての Control 次元を設定した。なお方法は質問紙法をとり，被験者としては大学生を用いた。

調　査　1

目　的

課題達成領域・対人関係領域×成功場面・失敗場面それぞれにおける原因帰属様式 (Locus, Global, Stable) と統制可能性 (Control) を測定する尺度，および領域の違いによる帰属様式の差（課題達成領域—対人関係領域），場面の違いによる帰属様式の差（成功場面—失敗場面）を測定する尺度を作成し，その信頼性について検討する。

方　法

一般的な帰属様式尺度，ASS ×× (Seligman et al. 1979)，鎌原ら (1983) (1984) の帰属様式尺度を参考にして，課題達成領域における成功場面 5 場面，失敗場面 5 場面，対人関係領域における成功場面 5 場面，失敗場面 5 場面，計 20 場面を作成した。課題達成領域の場面は，学校における学習状況のなかでの成績の高低，問題が解ける—解けないといった内容であり，対人関係領域の場面は友人をつくることができる—できない，友人から好かれる—きらわれるといった内容である。実際の場面内容は表 1 に示されているとおりである。次に，それ

表1　質問項目

課題領域	成功場面	1. もしもあなたがよい成績をとったとしたら
		2. もしもあなたが学校でだされた課題を簡単にやりおえることができたとしたら
		3. もしもあなたが授業中の先生の質問に正しく答えることができたとしたら
		4. もしもあなたがテストの問題を簡単に解くことができたとしたら
		5. もしもあなたがある科目の単位をとることができたとしたら
	失敗場面	1. もしもあなたが試験の問題ほとんどを解くことができなかったとしたら
		2. もしもあなたがある科目の単位おとしてしまったとしたら
		3. もしもあなたがテストの問題を解くことができなかったとしたら
		4. もしもあなたが学校でだされた課題を全部やりおえることができなかったとしたら
		5. もしもあなたが授業中先生の質問にほとんど答えることができなかったとしたら
対人領域	成功場面	1. もしもあなたが新しい友達をつくることができたとしたら
		2. もしもあなたがたくさんの友達を持っているとしたら
		3. もしもあなたが友達から好かれているとしたら
		4. もしも友達があなたに親切にしてくれたとしたら
		5. もしも友達があなたのことを頼りにしているとしたら
	失敗場面	1. もしもあなたが友達からきらわれているとしたら
		2. もしも友達があなたにいじわるをしたとしたら
		3. もしも友達があなたのことを頼りにしていないとしたら
		4. もしもあなたが新しい友達をつくることができないとしたら
		5. もしもあなたが友達がなく一人ぼっちだとしたら

次元項目	LOCUS	自分にある	1 2 3 4 5 6 7	周囲にある
	GLOBAL	影響する	1 2 3 4 5 6 7	限られる
	STABLE	将来において続く	1 2 3 4 5 6 7	将来なくなる
	CONTROL	コントロールできる	1 2 3 4 5 6 7	コントロールできない

ぞれの場面における原因帰属様式と統制可能性についての質問項目を作成した。原因帰属様式尺度としては，「その原因はあなた自身にあると思いますか，又は周囲の人や状況にあると思いますか。」(Locus 次元)，「その原因はこうした問題に限られたものだと思いますか，あるいは他の事にも影響していく原因だと思いますか。」(Global 次元)，「その原因は将来なくなるものだと思いますか，あるいは将来においても続いていくものだと思いますか。」(Stable 次元) の3項目とし，又，統制可能性尺度としては，「この状況をあなたはコントロールできるものだと思いますか。」(Control 次元) の1項目とし計4項目となった。なおこの4項目についてそれぞれ7段階での評定をもとめた。(表1参照)

被験者は都内の大学生121名（男52名，女69名）であり，昭和61年12月から62年6月にかけて調査した。

結　果

本尺度は全部で20場面（課題領域5場面＋対人関係領域5場面×成功場面・失敗場面)×4項目（Locus 次元，Global 次元，Stable 次元，Control 次元）で計80項目となっているが，これを領域，場面，項目により，16尺

表 2　各尺度の α 係数

		LOCUS	GROBAL	STABLE	CONTROL
課題領域	成功	.73	.81	.79	.72
	失敗	.79	.77	.74	.75
対人領域	成功	.73	.84	.80	.76
	失敗	.69	.79	.76	.74

表 3　差の尺度の α 係数

		LOCUS	GLOBAL	STABLE	CONTROL
成功－失敗	課題	.62	.60	.66	.54
	対人	.64	.62	.65	.59
課題－対人	成功	.58	.68	.60	.53
	失敗	.62	.66	.61	.58

度（各 5 項目）に分類した。そしてこの16尺度それぞれについて α 係数を算出し，その結果，.69～.84 の信頼性係数を示した。（表 2）次に，領域の違い，場面の違いによる帰属様式，統制感の差の尺度得点を考えた。これは対人関係領域と課題達成領域の違いが同じ場面の同じ帰属様式にどのような差を与えているか，あるいは成功場面と失敗場面の違いが同じ領域の同じ帰属様式にどのような差を与えているかということになる。これらの差の尺度変数は，課題達成領域の帰属様式得点から対人関係領域の帰属様式得点をひいたもの，成功場面の帰属様式得点から失敗場面の帰属様式得点をひいたものとして算出され，課題達成領域－対人関係領域・成功場面－失敗場面×4 項目で計 8 尺度となった。次にこの 8 尺度について α 係数をもとめた結果，.53～.68 の範囲の値をとった。以上の結果は表 3 に示されている。

考　察

本尺度は，課題達成領域と対人関係領域，および成功場面と失敗場面における帰属様式や統制可能性の差を反映できるよう作成された。つまり課題達成領域ではある帰属様式を持った人が対人関係領域では異なる帰属様式を持つのではないか，又，成功場面ではある帰属様式を持った人が失敗場面では異なる帰属様式を持つのではないかという帰属の変化という問題提起から出発している。そのため本尺度では，課題達成領域と対人関係領域，成功場面と失敗場面の帰属様式および統制可能性の各得点とともに，課題達成領域と対人関係領域の差の得点，成功場面と失敗場面の差の得点が必要となってくる。これらを解釈していくために各尺度得点の信頼性（α 係数）に加えて尺度差の信頼性係数を算出した。課題達成領域と対人関係領域，成功場面と失敗場面のそれぞれの次元尺度得点は，対人関係領域・失敗場面・Locus 次元の信頼性 α 係数0.69をのぞくとすべて .70 以上で，ある程度の信頼性を確保しているといえよう。これに対して，課題達成領域と対人関係領域との尺度得点差，成功場面と失敗場面との尺度得点差の信頼性は，原因帰属様式の 3 次元得点（Locus, Global, Stable）で .60～.68，統制可能性次元得点（Coutrol）で，.53～.59 と若干低くなっている。得点差の信頼性は，差をとる尺度の信頼性と，尺度間の相関係数から算出され，信頼性の高い得点差を確保するためには，各尺度得点の信頼性が高く，かつ尺度間の相関係数は低くなければならない。しかし本尺度では尺度間の相関係数が比較的高いため，得点差の信頼性が低下する結果となっている。又，Control 次元における尺度差の信頼性係数は，他の尺度差の信頼性係数にくらべ低い信頼性を示したが，これは Control 次元の尺度間の相関係数が他の次元の尺度間の相関係数より高かったことに起因する。言いかえるならば，Control 次元の尺度得点は，課題達成領域や対人関係領域，成功場面や失敗場面の影響を，比較的うけなかったのだと言える。Control 次元は，原因の位置としての内的－外的次元（Locus 次元）とは異なり，その状況全体に対する個々人の統制感に近いものとなる。そしてこの個人の統制感というものは，Rotter (1966) の社会的学習理論によれば，個人がこれまでの統制感の経験を経て，個人内にものの見方として獲得していくものであり，状況の差にとらわれない一つの人格変数としてとらえられる。そのため，様々な状況における統制感としての Control 次元得点は，個人内では大きな差を示さなかったものと考えられる。

調　査　2

目　的

調査で作成した尺度を用いて，課題達成領域・対人関係領域×成功場面・失敗場面それぞれにおける原因帰属様式（Locus, Global, Stable）と統制可能性（Control）を測定する尺度得点，および領域の違いによる帰属様式の差（課題達成領域－対人関係領域），場面の違いによ

る帰属様式の差（成功場面—失敗場面）を測定する尺度得点と，性格尺度との関連を調べる。

方　法

まず原因帰属様式尺度では，課題達成領域・対人関係領域×成功場面・失敗場面×Locus 次元・Global 次元・Stable 次元・Control 次元，計16尺度得点，課題達成領域—対人関係領域×成功場面・失敗場面×Locus 次元・Global 次元・Stable 次元・Control 次元，計8尺度得点，成功場面—失敗場面×課題達成領域・対人関係領域×Locus 次元・Global 次元・Stable 次元・Control 次元，計8尺度得点を算出する。次に性格尺度としては標準的な性格検査である YG 性格検査を用いる。YG 性格検査は，社会的外向性から抑うつ性にいたる12性格変数をとりあげているが，今回の調査ではこれらの性格変数を実験的に用いて，前述の帰属尺度との関係を探索的に調査する。

被験者は，都内の女子大学生113名であり，調査は昭和62年6月～7月におこなわれた。

結　果

まず，課題達成領域・対人関係領域における成功場面・失敗場面に対する Locus 次元，Global 次元，Stable 次元，Control 次元の16尺度と YG 性格検査の12性格変数との相関係数を算出し，10% 域で有意なもののみ表4に示した。全体的には，Locus 次元と性格変数との相関係数が比較的高かった。課題達成領域と対人関係領域について言えば，Stable 次元では課題達成領域における相関係数が比較的高く，Control 次元では対人関係領域における相関係数が比較的高く，その他の次元においては特に差が見られなかった。又，成功場面と失敗場面について言えば，Locus 次元において成功場面で高い相関係数が比較的算出されたことを除けば，特に差は見られなかった。以上の結果はいずれも有意なものではなく，これらを総合するとこれら16尺度については性格尺度との関連において特に差異はないようである。次に，性格変数の側から見れば，第8番目である客観性でないこと（空想的，過敏性，主観性）がすべての尺度に対して相対的に高い相関係数を示した。又，YG 性格検査は社会的外向性から抑うつ性までを一連の連続した性格特性と考えるため，第1番目の変数である社会的外向性から第3番目の変数である思考的外向性までが，ほとんどすべての成功場面の帰属変数と正の相関関係を持ち，逆に，第10番目の変数である劣等感の強いことから第12番目の変数である抑うつ性がほとんどすべての成功場面の帰属変数と負の相関関係を持った。これは課題達成領域であれ，対人関係領域であれ，社会的外向性が高いほどその成功の原因は自分にあり，広く影響し，将来も続き，コントロールできると認知しており，抑うつ性が高いほどその成功の原因は他にあり，影響せず，将来には続かず，コントロールできないと認知したといえる。

しかし，これらの解釈をより明確化するためにはやはり成功場面と失敗場面での帰属様式の差，課題達成領域と対人関係領域での帰属の差をとりあげる必要性があると考えられる。そこで，YG 性格尺度の両極端であり，又成功場面と失敗場面との帰属様式の差や課題達成領域と対人関係領域との帰属様式の差と関連があると推測される社会的外向性と抑うつ性を使ってこの明確化を試みた。社会的外向性という性格傾向は，対人場面での外向性，社会的接触を好む傾向であるため，領域が課題達成領域であるか，対人関係領域であるかの影響を受けるのではないかと考えられる。又，抑うつ性という性格変数は，非観的気分を測っており，場面が成功場面であるか，失敗場面であるかの影響をうけると考えられる。つまり，高い社会的外向性を示す人と低い社会的外向性を示す人とでは課題達成領域と対人関係領域の帰属様式の差が異なるのではないか，又，高い抑うつ性を示す人と低い抑うつ性を示す人とでは成功場面と失敗場面との帰属様式の差が異なるのではないかと予想される。これらの仮説を検証するために，調査1で検討した課題達成領域と対人関係領域の差の尺度，成功場面と失敗場面の差の尺度を用いて，社会的外向性ならびに抑うつ性との関連を調査した。

まず，被験者の中から YG 性格検査の社会的外向性得点の上位30名，下位30名，および抑うつ性得点の上位30名，下位30名を抽出した。まず，社会的外向性高得点群と社会的外向性低得点群における，課題達成領域—対人関係領域×成功場面・失敗場面×Locus 次元・Global 次元・Stable 次元・Control 次元計8尺度のそれぞれの平均を示したものが表5である。その結果，Locus 次元の成功場面 ($t=2.22$, $p<0.05$), Global 次元の成功場面 ($t=2.35$, $p<0.05$), Stable 次元の成功場面 ($t=2.64$, $p<0.05$) と失敗場面 ($t=1.68$, $p<0.1$) において社会的外向性高得点群と低得点群の間に，課題達成領域—対人関係領域尺度得点の5%から10%水準の有意差を見出した。さらに，抑うつ性高得点群と抑うつ性低得点群における，成功場面—失敗場面×課題達成領域・対人関係領域×Locus 次元・Global 次元・Stable 次元・Control 次元計8尺度の平均を示したものが表6である。その結果，Locus 次元の課題達成領域 ($t=1.83$,

表 4 人格尺度との相関

	LOCUS				GLOBAL				STABLE				CONTROL			
	課題		対人		課題		対人		課題		対人		課題		対人	
	成功	失敗	成功	失敗	成功	失敗	成功	失敗	成功	失敗	成功	失敗	成功	失敗	成功	失敗
1. 社会的外向			−.23*				.16								.17	
2. 支配性			−.20													
3. 思考的外向																
4. のんきさ	−.19	−.16						−.16	−.15	−.24*				−.15		
5. 一般的活動性	19		.25*					−.16								
6. 愛想のよいこと																
7. 協調的でないこと						−.28**	−.32**	−.26*	−.25*	−.15	−.19					
8. 客観的でないこと	−.25*	−.16	−.23*	−.24*	−.26*	−.16	−.19		−.15	−.15						−.19
9. 神経質	−.33**		−.28**										−.21	−.18	−.24*	−.22*
10. 劣等感の強いこと	−.31**		−.22*												−.20	−.23*
11. 同帰性傾向	−.28*		−.29**		−.19	−.18									−.16	−.18
12. 抑うつ性	−.19		−.27*				−.17								−.21*	

* $p<0.05$ ** $p<0.01$

表 5 社会的外向性高群・低群の領域差得点

		高社会的外向性	低社会的外向性	
LOCUS	成功	−0.1	0.9	**
	失敗	−0.5	0.2	
GLOBAL	成功	−1.7	−0.5	**
	失敗	−0.7	=0.7	
TSABLE	成功	−1.3	−0.3	**
	失敗	−1.0	−1.9	*
CONTROL	成功	−0.1	−0.3	
	失敗	0.2	0.9	

* $p<0.05$ ** $p<0.10$

表 6 抑うつ性高群・低群の場面差得点

		高抑うつ性	低抑うつ性	
LOCUS	課題	−0.8	0.1	*
	対人	−0.4	0.5	*
GLOBAL	課題	0.1	0.4	
	対人	0.2	1.5	**
STABLE	課題	0.7	0.6	
	対人	1.4	1.4	
CONTROL	課題	−0.3	−0.1	
	対人	1.0	0.4	

* $p<0.05$ ** $p<0.10$

$p<0.1$), Locus 次元の対人関係領域 ($t=1.69$, $p<0.1$), Global 次元の対人関係領域 ($t=2.40$, $p<0.05$) において，抑うつ性高得点群と抑うつ性低得点群との間に，成功場面—失敗場面尺度得点の 5% から 10% 水準の有意差を見出した。

考 察

調査 2 では，調査 1 で作成した様々な状況に対する原因帰属様式や統制感の尺度と人格変数（YG 性格検査）との相関を見た。そして原因帰属様式や統制感といった認知変数と YG 性格検査によって測定された人格変数との間の相関関係が認められたため，原因帰属様式や統制感の領域差・場面差の尺度と人格変数との関連を明確化した。今回は実験的に，社会的外向性と抑うつ性という 2 変数を用いたが，両変数とも領域差や場面差の尺度との関連を見せた。

まず社会的外向性と，課題達成領域と対人関係領域の領域差との関連についていえば，Locus 次元の成功事態において社会的外向性の低い人が社会的外向性の高い人にくらべ正の方向により大きな差を示した。これは社会的外向性の低い人は，課題達成状況において成功したのは自分自身に原因があるのだが，対人関係状況において成功したのはむしろ周囲の人や状況に原因があるのだというように，成功が課題達成におけるものなのか，対人関係におけるものなのかによって成功に対する認知様式を変えているといえる。続く Global 次元の成功場面，Stable 次元の成功場面では，社会的外向性の高得点群が，課題達成領域と対人関係領域とで大きな帰属の差を示しており，対人関係領域の成功のほうが課題達成領域の成功にくらべ，他の事にも影響し，将来も続くと認知している。逆に Stable 次元の失敗場面では，社会的外向性の低得点群が，課題達成領域と対人関係領域とで，より大きな帰属の差を示しており，対人関係領域の失敗のほうが課題達成領域の失敗にくらべ，将来も続くと認知している。

次に，抑うつ性と，成功場面と失敗場面の場面差との関連では，まず，Locus 次元では課題達成領域，対人関係領域とも，抑うつ性低得点群が正の方向への帰属の差を，抑うつ性高得点群が負の方向への帰属の差を示している。差の絶対値からは両群には差はないが，差の方向性が異なり，課題・対人両領域とも抑うつ性の低い人は失敗場面より成功場面を内的と認知し，抑うつ性の高い人は成功場面より失敗場面を内的と認知していることが示された。又，Global 次元の対人関係領域において，抑うつ性低得点群が抑うつ性高得点群より大きな帰属差を示しており，抑うつ性の低い人は，対人関係状況では成功を失敗より影響するものとして認知している。以上の抑うつ性と成功場面・失敗場面の帰属差は，Seligman et al. (1979) の結果を支持するものとなっており，抑うつ性の低いほど成功を内的に，影響するものと認知している。しかし，Stable 次元，Control 次元では特に差は見られなかった。又，課題達成領域では Locus 次元を除くと成功場面と失敗場面との間に大きな差が見られたものはなく，やはり Anderson & Arnoult (1985) が指摘するように，抑うつ感は対人関係領域の原因帰属様式と関連が深いものと考えられる。

ま と め

本研究では状況が異なると原因帰属様式はどのような

変化するのか，またその変化とある種の性格傾向とはどのようにかかわっているのかという点について探索的考察を試みた。そもそも Abramson らによる Learned Helplessness に関する一連の研究では，まず回避逃避学習における非随伴性認知が大前提となっているため，状況が非随伴状況や学習状況に限定される傾向があった。しかし，抑うつ傾向一つを取りあげてみても，人が抑うつ感を強く感じるのは，むしろ対人状況においてであり，本研究においても，課題達成領域の帰属様式よりは対人関係領域の帰属様式のほうが抑うつ性と関連が深いことが示された。また，状況の変化に伴なう帰属様式の変化は，今回は帰属様式間の差を尺度として用い，状況によって帰属様式を変化させること，させないこと，あるいは変化の方向性が性格変数と関わっていることが示された。しかし，今後は単純に差を変数としてとりあげるのではなく，より大きな枠組をもって帰属様式の変化をとりあげることを課題としたい。

引用文献

Abramson, L. Y., Seligman. M. E. P., & Teasdale, J. (1979) Learned Helplessness in humans: critique and reformulation. Journal of Abnormal Psychology, 87, 49-74

Anderson, C. A., & Arnoult, L. H. (1985) Attributional style and everyday problems in living: Depression, loneliness, and shyness. Social cognition, 3, 16-35

Anderson, C. A., Horowitz, L. M., & French, R. (1983) Attributional style of lonely and depressed people. Journal of *personality* and social psychology, 45, 127-136

樋口一辰・鎌原雅彦・大塚雄作 (1983) 児童の学業達成に関する原因帰属モデルの検討，教育心理学研究，31，18-27

Rotter, J. B. (1966) Gereralized expectation for internal vs. external control of reinforcement. Psychological monographs, 80, 1-28

Seligman, M. E. P., Abramson, L. Y., Semmel, A., & von Baeyer, C. (1979) Depressive attributional style. Journal of abnormal psychology, 88, 242-247

Weiner, B. (1979) A theory of motivation for some classroom experiences. Journal of educational psychology, 69, 506-511